国立国語研究所学術情報リポジトリ

青森県南部野辺地方言の音韻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2021-01-15 キーワード: 東北方言, 南部方言, 音韻論 作成者: 中川, 奈津子, NAKAGAWA, Natsuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003092

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 20: 41–55 (2021)
ISSN: 2186-134X print/2186-1358 online

青森県南部野辺地方言の音韻

中川奈津子

国立国語研究所 研究系 言語変異研究領域

要旨

本稿は，青森県上北郡野辺地町で話されている，南部方言の一変種の音韻を記述する。野辺地町について簡単に紹介したあと，母音，子音，音節構造に関してそれぞれ議論する。共通語化の影響により，母音も子音も揺れが大きく，その「揺れ幅」によってしか音素を同定できないと主張する。特に /i,u/ の認定が困難で，共通語との対応が意識されない語における [i] は揺れがないものもあるため，音素の同定に問題が生じることを指摘する。音節構造に関しては，長母音は認定せず，長子音とコーダ位置の /n/ を認定するが，認定方法にはまだ課題が残されていることを指摘する *。

キーワード：東北方言，南部方言，音韻論

1. はじめに

本論は，青森県南部野辺地方言の音韻と残された問題に関して議論する。筆者は 2016 年春ごろから 3 年にわたって青森県上北郡野辺地町の方言を調査してきた。その結果をここに報告する。

1.1 野辺地町について

野辺地町は下北半島の付け根に位置し，烏帽子岳などの山々と陸奥湾に挟まれた自然豊かなところにある。江戸時代には，上方との交易船である北前船で栄えたので，野辺地祇園祭を催すなど文化的には上方の影響も見られる。また，北前船が停泊していた日本海側の各地域との交流も盛んであったと考えられる。戊辰戦争後には，福島県（会津藩）からの移民も来た。終戦直後に外地（満州など）から引き上げてきて住み着いた人たちもいるという。近年は主に六ケ所村の開発の影響で他府県からの労働者の流入，結婚による移住も珍しくない。

野辺地町は人口 13,503 人（2015 年現在），ホタテなどの魚介類，小かぶなどの農産物の生産が盛んだが，現在では第 3 次産業に従事する人口が最も多い [1]。

* 本稿執筆の前に，第 103 回九州大学言語研究会，The NINJAL International Symposium ‘Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization”，NINJAL サロンなどの研究会で発表させていただき，有益な質問・コメントをいただいた。すべての方々の名前をあげることができず心苦しいが，以下の方々に感謝したい：下地理則氏，黒木邦彦氏，田窪行則氏，上野善道氏，木部暢子氏。また，音韻論の勉強会を通じて松浦年男氏に多くの有用な文献を教えていただいた。本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（プロジェクトリーダー：木部暢子），JSPS 科研費 18K12360 の研究成果を報告したものである。

野辺地町の方々，特に音声と膨大な時間を提供してくださっている角鹿三つ瀬氏，語彙収集に協力してくださっている上原子節氏にお礼申し上げます。また，工藤信子氏，社会福祉法人福祉の里の方々，野坂幸子氏，坂本尚子氏に大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。

[1] 国勢調査より。https://www.e-stat.go.jp（最終アクセス年月日：2018/10/2）

1.2 野辺地方言について

話者らの報告によれば，野辺地では南部弁が話されており，青森県東南部（八戸市など）や岩手県と，細かい違いはあるものの共通の方言であると認識されている。南部弁は，津軽弁や下北弁とは異なると考えられているが，津軽や下北との境界に接していることもあり，津軽方言，下北方言と似ているところも見られる。若者の間では，アクセントやイントネーション，母音間に挟まれた無声子音の有声化など，一部の方言らしさが残されているが，語彙はほとんど共通語と同じである。流暢に方言を話すと考えられる 65 歳以上の人口は，約 4600 人である。日本語共通語と昔からの方言は世代間で連続的につながっていることもあり，UNESCO の基準などで方言の危機度を測るのは困難である。それぞれの世代において，方言の側面のうち，継承されている部分とされていない部分がある。しかし，若い世代ほど共通語に近い方言を話しており，この方言は消滅の危機に瀕しているといえる。

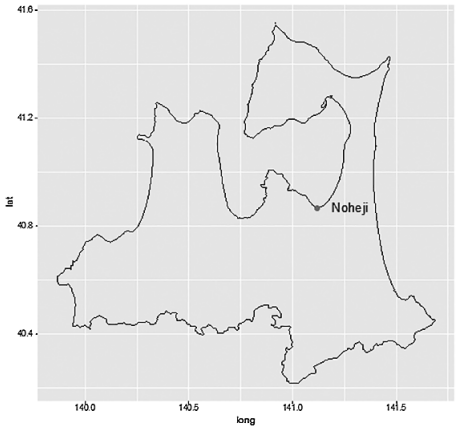


図 1　野辺地町の位置

野辺地の中心地である町中の方言と，（多くは周辺部に住んでいる）農家，漁業者らの方言は異なるといわれる。特に津軽との境界に最も近い馬門地区では津軽方言の影響が強く，町中の方言とは異なるものと認識されている。本稿では野辺地の中心地である町中の方言に関して記述する。

1.3 主要な先行研究

野辺地方言に特化して音韻を記述した文献は筆者の知る限り存在しないが，野辺地方言をひらがなで書いた語彙集（中市謙三 1936/1999）がある。アクセント資料として，八戸市と下北郡風間浦村の名詞を収集した上野善道 (2017) がある。また，青森県の方言を概観した此島正年 (1982) も存在する。野辺地方言と類似する，岩手方言の音韻に関しては，上野善道（1973），齋藤孝滋 (1992a, 1993）などの文献が存在する。東北方言という言語圏まで視野を広げればもっと多くの文献がある。代表的なものは，井上史雄（1968），大橋純一（2002），高田三枝子（2006）などである。

2. 母音

表 1 にこの方言の母音を示す。後に述べるように，おそらく共通語化の影響で揺れが大きく，異音を丸括弧の中に入れて ~ のあとに示している。~ は自由変異の音を書くときに用いる。

表 1　野辺地方言の母音

	前舌	中舌	後舌
狭	/i/[i (~ ɨ)]		/ɯ/ [ɯ (~ ɨ)]
半狭	/e/ [e (~ ɪ, e̞)]		[o] /o/
半広	/ɛ/ [ɛ]		
広		/a/ [a]	

図 2 は 1 人の話者（1945 生，女性）に単語を読み上げてもらったものを録音し（使用機材：Edirol R-09HR，マイク：SONY ECM-MS907），Mietta Lennes 氏作成の Praat スクリプト [2] で各母音のフォルマントをプロットして作成した。この図からもわかるとおり，母音は /a, e, ɛ, i, o, u/ ([a, e, ɛ, i, o, ɯ]) の 6 種類存在する（[ɛ] は E としてプロットした。）/e/ と /ɛ/ の違いに関しては 2.4 節で述べる。

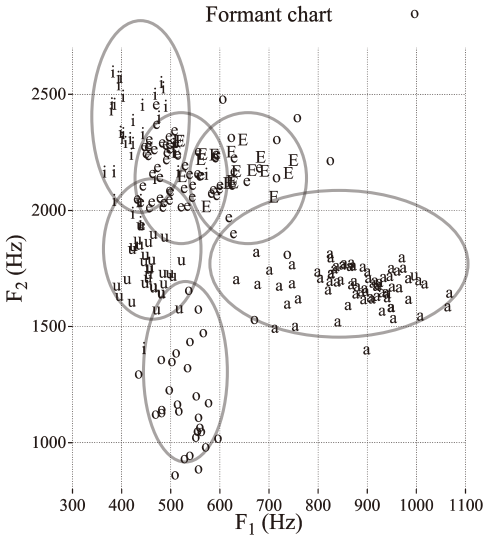


図 2　各母音のフォルマント散布図

準ミニマルペア（同じ環境に現れる母音）を以下に示す。（1）は [k] に後続する母音で，/a, e, ɛ, i, o, u/ ([a, e, ɛ, i, o, ɯ]) の 6 種類あることを示す。

（1）　a.　[k**a**ttʃa] /kattja/ ‘ 結婚した女性，お母さん ’
　　b.　[k**e**ttsɨ] /kettu/ ‘ 尻 ’
　　c.　[k**ɛ**na] /k**ɛ**na/ ‘ 腕 ’
　　d.　[k**o**bɯra] /kobura/ ‘ 家と家の間の道 ’
　　e.　[k**i**na] /kina/ ‘ 昨日 (は)’
　　f.　[k**ɯ**dʒi] /kuzi/ ‘ 口 ’

[2] draw_formant_chart.praat (https://lennes.github.io/spect/)

同様に，[h] に後続する母音 [a, e, i, o] を示す。後述するように，[h] は [ɯ] の前では [ɸ] と発音されやすい。[ɛ] の例は見つからなかった。

(2) a. [h**a**] /ha/ ‘ 歯 ’
b. [h**e**] /he/ ‘ 屁 ’
c. [h**o**ne] /hone/ ‘ 骨 ’
d. [h**i**^{n}dʒi] /hi˜zi/ ‘ 肘 ’

2.1 /a/

/a/ は共通語と同様の発音で，最も揺れの小さい母音である。以下に例をあげる。

(3) a. [w**a**] /wa/ ‘ 私 ’
b. [n**a**] /na/ ‘ お前 ’
c. [**a**ʃid**a**] /asida/ ‘ 下駄 (足駄)’

図 2 を見てもわかるとおり，/a/ は他の母音との重複がほとんどない。

2.2 /o/

/o/ も /a/ と同様に揺れが少ない母音で，ごくたまに /u/ との揺れが見られるが，(4) のようなミニマルペアを見つけることができる。

(4) [m**o**tsɨ] /motu/ ‘ 内臓 ’ vs. [m**ɯ**tsɨ] /mutu/ ‘ 陸奥 ’

/u/ との揺れの例として (5) があげられる。共通語の ‘ くるぶし ’ にあたる語が [kɯɾ**o**bɯʃi] と発音されても [kɯɾ**ɯ**bɯʃi] と発音されても，どちらでも良い。

(5) [kɯɾ**o**bɯʃi] ~ [kɯɾ**ɯ**bɯʃi] ‘ くるぶし ’

他にも中市 (1936/1999) には「**お**ま」‘ 馬 ’ の「お」,「みつどう**ご**」‘ 三つ道具 ’ の「ご」,「**も**ご」‘ 向こう ’ の「も」など /u/ と想定される音が /o/ で書かれていることがある。過去のある時点では /u/ が何らかの条件で /o/ と発音されていたのかもしれないが，現在では /u/ と /o/ が自由に交替することは稀であるので，‘ くるぶし ’ などは例外とし，/u/ と /o/ をそれぞれ独立の音韻として認める。このような現象は母音調和の痕跡である可能性もある。

2.3 /i/ vs. /e/

以下のミニマルペアが示すとおり，/i/ と /e/ は独立の音韻として区別されている。

(6) a. [m**i**ɾɯ] /miru/ ‘ 見る ’
b. [m**e**ɾɯ] /meru/ ‘ 見える ’

/i/ は /s, z, t, d, k/ のあとで [ɨ] と自由交替する。/k/ と [ɨ] の間では, 母音の狭さに伴って(7)の [kˢ] のように摩擦音が聞こえることもある。

(7) a. [asɨ] ~ [aʃi] /asi/ ‘ 足 ’
b. [tsɨ̥tsɨ] ~ [tʃitʃi] /titi/ ‘ 乳 ’
c. [kˢɨ̥ta] ~ [ki̥ta] /kita/ ‘ 来た ’

[i] が予測されるところで [e] が出現するときもあり，これも母音調和の痕跡ではないかと考えられるが, 揺れがないので現在の規則としては母音調和を設定せず, 基底でも /e/ であると考える。

(8) a. [m**e**kkeɾɯ] /mekkeru/ ‘ 見つける ’
b. [m**e**heɾɯ] /meheru/ ‘ 見せる ’

/h/ の後ろでは /e/ が極端に狭くなり, [e ~ e̞ ~ ɪ] のような揺れがある。/he/ の例は少数しかなく，今見つかっている中では（9）のみが揺れを見せており，（10）も /he/ の例であるが，このような揺れは見られない。

(9) [h**e**naɡa] ~ [h**e̞**naɡa] ~ [hɪnaɡa] /henaɡa/ ‘ 背中 ’
(10) a. [ɡah**e**] /ɡahe/ ‘ 体つき，体型 ’
b. [h**e**waʃine] /hewasine/ ‘ せわしい，落ち着きがない ’

/hi/ のほうに揺れは少なく，[i] と発音されることが多い。

(11) a. [h**i**ⁿdʒakabɯ] /hi˜zjakabu/ ‘ 膝 ’
b. [h**i**joɾi] /hijori/ ‘(足駄より低い) 下駄 ’
c. [h**i**dzɯ] /hizu/ ‘ 氷頭 (鮭の頭)’

歴史のある段階では，語頭や語末の /i/ と /e/ が区別されていなかった痕跡がある。例えば ‘ 家 ’ にあたる語は /e/ が予測される（実際，中市（1936/1999）には「え」と記載されている）が，筆者の接している話者らは [i] と発音している。/i/ が予測される ‘ 飯 ’ も [i] と発音され，「飯寿司」という郷土料理 [3] の名前が「家寿司」と書かれていることがあり, /i/ と /e/ が区別されていなかったことの傍証となる。

(12) a. [**i**] /i/ ‘ 家 ’
b. [**i**zɯʃi] /i-zusi/ ‘ 飯 - 寿司 ’

2.4 /e/ vs. /ɛ/

此島（1982: 228）によると，青森の方言では，狭い /e/ と広い /ɛ/ を区別するとされている。/e/ は語源でも /e/ に対応するもので，/ɛ/ は語源では /ai/, /ae/ などに対応するとされる。実際,

[3] 魚をご飯の中に埋めて発酵させたもの。

野辺地方言でもこの報告のとおり，[e] と [ɛ] の分布がわかれているように思われる。図 3 は，語源で /e/ に対応するものを ‘e’, /ai/, /ae/ に対応するものを ‘E’ としてフォルマントをプロットしたものである。お互いに重なりはあるものの，‘E’ の第 1 フォルマントのほうが値が大きい（*t* 検定で $p < 0.001$）。

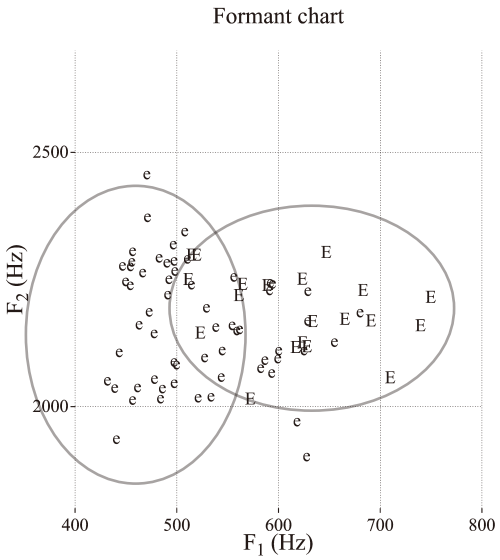


図 3　/e/ vs. /ɛ/

この区別を話者に尋ねても，はっきりした答えは得られないことがある。例えば [ne-kko] ‘根 -DIM’ と [nɛ-kko] ‘苗 -DIM’ が違って聞こえるかどうかを尋ねても，音の高さ等の区別が指摘されることがあるが，[e] と [ɛ] を区別している様子はない。一方で，今回録音に協力してくれた話者は，「イに近いエ」と「アに近いエ」のような表現をして区別をしていたので，少なくともこの話者に関しては [e] と [ɛ] の区別があると考える。

2.5 /i/ vs. /u/

上に述べたように，/i/ は /s, z, t, d, k/ のあとで [ɨ] と発音されることがある。/u/ も，通常は [ɯ] と発音されているが，/s, z, t, d/ のあとで [ɨ] と発音されることがあるので /i/ との区別がなくなる。しかし，/i/ は /s, z, t, d/ のあとで（特に共通語との対応が意識しやすい語において）[i] と発音されることもあるので，/s, z, t, d/ のあとでも /i/ と /u/ が区別されていると考える。つまり，語源が意識されている場合には，/i/ は [i~ɨ] の揺れ幅を持つが，/u/ は [ɨ] のみの発音となる。例えば，（13）/asi/ は [asɨ ~ aʃi] の間で発音が揺れる（したがって後に述べるように /i/ の直前の子音も変化する）が，/sune/ は [sɨne] としか発音されず，[ʃine] とは発音されない。同様に，（13）/titi/ も，[tsɨtsɨ ~ tʃitʃi] の間で揺れる（そして直前の子音も変化する）が，（14）/motu/ は [motsɨ] とだけ発音される。[motʃi] は ‘餅’ という別の語になり，区別されている。また，[ɨ] はオンセットなしの音節には現れない。

（13） a. [asi̥ ~ aʃi̥] /asi/ ‘ 足 ’ vs. [si̥ne] /sune/ ‘ すね ’
b. [tsi̥tsi̥ ~ tʃi̥tʃi̥] /titi/ ‘ 乳 ’ vs. [motsi̥] /motu/ ‘ 内臓 ’

（14） a. [kɯ̥tʃi̥] /kuti/ ‘ 口 ’ vs. [kɯ̥tsi̥] /kutu/ ‘ 靴 ’
b. [motsi̥] /motu/ ‘ 内臓 ’ vs. [motʃi̥] ‘ 餅 ’

共通語との対応が意識されない語に関しては，[i ~ i̥]，[ɯ ~ i̥] の揺れは見られず，[i̥] と発音される。この場合，基底が /i/ なのか /u/ なのかを知るすべはない。（15）に例をあげる。

（15） a. [bottsi̥] /botti? bottu?/ ‘(タコなどの) 頭 ’
b. [entsi̥ko] /entiko? entuko?/ ‘ 赤ん坊を入れる籠 (嬰児籠)’
c. [hondzi̥naʃi] /honzinasi? honzunasi?/ ‘ 物を知らない人 ’

日本語共通語と同様，狭母音 /i, u/ は，無声子音に挟まれると無声化するが，共通語と異なり，語末では無声化しない。この規則を（16）に示す。

（16） [+high, +vowel] → [-voiced] / [-voiced] ___ [-voiced]

3. 子音

野辺地方言の子音一覧を表 2 に示す。子音も共通語化の影響で揺れが大きく，異なる音素どうしの異音が重なることで記述が困難になっている。母音と同様，子音も異音の「揺れ幅」で同定する必要がある。例えば，歴史的な音韻規則として，無声閉鎖音は母音間で有声化し，有声閉鎖音は前鼻音化（/˜g/ の場合は鼻音化（[ŋ]））していたが，特に共通語との関連が明らかな語に関しては，この有声化・前鼻音化がキャンセルされ得る。齋藤孝滋（1992b）も岩手方言において，改まった場面で有声化がキャンセルされやすいと報告している [4]。

表 2 野辺地方言の子音

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂	/˜p/ [ᵐp] /p/ [p] /b/ [b]	/t/ [t] /d/ [d (~ t)]		/k/ [k] /g/ [g (~ k)]	
	/˜b/ [ᵐb (~ b)]	/˜d/ [ⁿd (~ d)]		/˜g/ [ŋ (~ g)]	
摩擦		/s/ [s] /z/ [z (~˜z)]			/h/ [h]
鼻	/m/ [m]	/n/ [n]			
はじき		/ɾ/ [ɾ]			
接近			/j/ [j]	/w/ [w]	

3.1 破裂音

破裂音のミニマルペア，準ミニマルペアを列挙する。上述の歴史的な経緯により，無声音は語

[4] 齋藤（1992b）によれば前鼻音化は改まった場面でもキャンセルされるという傾向は観察されなかった。齋藤はこれを「鼻音化現象は，方言現象として認知され難いため」(p. 117）としている。筆者の印象では，野辺地方言では改まった場面において前鼻音化もキャンセルされやすい。

頭，有声音と前鼻音化音は語中に分布が偏っているため，ミニマルペアを見つけるのは困難である。その場合は例のみをあげた。

現行では，筆者の集めた /p/ を含む語彙は 2 例しかないが，中市（1936/1999）には，「ままぱ」‘継母’，「ぱっぺ」‘きたない’，「しのぴこ」‘スイバ，すかんぽ’ など，様々な語彙が見られる。/b/ は原則として語頭に現れるが，（17）のように語中に現れることもある。

（17） /p/ vs. /b/

a. [a**pp**a] /appa/ ‘年のいった結婚した女性’ vs. [a**b**a] /aba/ ‘appa の見下した言い方’

b. [tʃo**p**etto] /tjopetto/ ‘ちょびっと’

c. [**b**iɴ] /bin/ ‘もみあげ’

d. [**b**a:**b**a] /baba/ ‘おばあさん’

e. [nosa**b**aɾɯ] /nosabaru/ ‘甘える’

/ˇb/ は（18）のように，語中にのみ現れる。

（18） /ˇb/

a. [ha^{m}**b**aɡerɯ] /haˇbaɡeru/ ‘手に余る’

b. [ko^{m}**b**iri] /koˇbiri/ ‘おやつ’

c. [o^{m}**b**a-sama] /oˇba-sama/ ‘年のいった結婚した女性’

/ˇp/ は(19)のように語中に出現する。歴史的には /ˇb/ だったが，前鼻音 [^{m}] の手がかりにより [^{m}b] と [^{m}p] が /ˇb/ の異音であると解釈された結果，[^{m}b] の [b] が無声化して [^{m}p] となったものと考えられる。現在では，/ˇp/ が /ˇb/ と自由交替することはなく，揺れも見られないので，/ˇp/ という音素を設定した。

（19） /ˇp/

a. [jɯ^{m}**p**ɯ̥te] /juˇpute/ ‘煙たい’

b. [ne^{m}**p**ɯ̥te] /neˇpute/ ‘眠たい’

（20）に，/t, d, ˇd/ の例をあげる。/t/ は語頭，/d/ は語中に多い傾向があるが，/p, b/ と同様に例外も存在する。/ˇd/ は語中にのみ現れる。

（20） /t/ vs. /d/ vs. /ˇd/

a. [**t**okkɛsɯ] /tokkɛsu/ ‘取り返す’

b. [aʃi̥**t**a] /asita/ ‘明日’ vs. [aʃi**d**a] /asida/ ‘足駄’

c. [sono**d**e] /sonode/ ‘腱鞘炎’

d. [aɡɯ**d**o] /aɡudo/ ‘かかと’

e. [ora**d**o] /ora=do/ ‘1-COM’ vs. [ora^{n}**d**o] /ora-ˇdo/ ‘1-PL’

f. [kama^{n}**d**o] /kamaˇdo/ ‘分家’

/t, d, ˜d/ は, [i] の前でそれぞれ [tʃ, dʒ, ⁿdʒ], [i] の前でそれぞれ [ts, dz, ⁿdz] と発音される。上述（2.5 節）のとおり，/i/ は [i] と [ɨ] の間で揺れ，/u/ は [ɨ] と [ɯ] の間で揺れている。この揺れに従って，/t, d, ˜d/ の異音も変化する（2.5 節の（13），（14）の例を参照）。（21）にこの音韻規則を示す。

（21） a. [+alveolar, +stop] → [+post-alveolar, +affricate] / ___ [i]
b. [+alveolar, +stop] → [+alveolar, +affricate] / ___ [ɨ]

（14）/kuti/ [kɯ̥tʃi] ‘ 口 ’ は，母音 [ɯ] が無声化せずに [tʃ] が有声化して [kɯdʒi] と発音されることもある。以下に述べるように，/z/ も [i] の直前で [dʒ] と発音されるので，[i] の前では /d/ と /z/ の区別ができない。基本的に [dʒ] は /z/ で表記する方針だが，[kɯdʒi] の場合は [kɯ̥tʃi] との揺れを勘案して /kudi/ と表記する。[kɯ̥tʃi] と発音される場合は /kuti/ と表記する。

（22）に /k, g, ˜g/ の例をあげる。他と同様, /k/ が語頭, /g/ と /˜g/ が語中に現れるのが原則だが，例外も存在する。（22）[ŋa] のように /˜g/ から始まる語も，わずか 1 例しか見つかっていないが，存在する [5]。

（22） /k/ vs. /g/ vs. /˜g/
a. [tsɨ̥**k**ɐɾɯ] /tukeru/ ‘ 付ける ’ vs. [tsɨ**g**ɐɾɯ] /tugeru/ ‘ 付けることができる ’ vs. [tsɨ**ŋ**ɐɾɯ] /tu˜geru/ ‘ 告げる ’
b. [a**g**ɐɾɯ] /ageru/ ‘ 開ける ’ vs. [a**ŋ**ɐɾɯ] /a˜geru/ ‘(仏壇にものを) 供える ’
c. [**ŋ**a] /˜ga/ ‘2 (お前)’

3.2 摩擦音

摩擦音 /s, z, ˜z/ の例を以下に示す。

（23） /s/ vs. /z/ vs. /˜z/
a. [**s**onode] /sonode/ ‘ 腱鞘炎 ’
b. [**s**aɾɯkodʒiŋi] /sarukozi˜gi/ ‘ 遠慮すること，人 ’
c. [gos**e**ɾimandʒu] /goseri-ma˜zju/ ‘ 御祭礼まんじゅう ’
d. [juɯkid**z**o˙ɾi] /juki-zori/ ‘ 雪-草履 ’
e. [d**z**imbɯ] /zimbu? zumbu?/ ‘ ずいぶん ’
f. [hid**z**ɯ] /hizu/ ‘ 氷頭 (鮭の頭)’
g. [a**ⁿdz**imaʃi] /a˜zumasi/ ‘ 心地よい ’

共通語と同様，/s, z, ˜z/ は [i] の直前でそれぞれ [ʃ, dʒ, ndʒ] と発音される。これを規則（24）として以下に示す。[i] が [ɨ] と発音される場合はこの規則は適用されない。

[5] ただし，/nga/ はメインコンサルタントの使用語彙ではなく理解語彙で，主に馬門地区で使われているようだ。

（24） [+alveolar, +fricative] → [+post-alveolar] / ___ [i]

例を（25）にあげる。

（25） a. [ʃimoɾɯ] /simoru/ ‘(味が食べ物に) 染みこむ ’
b. [waɾaʃi] (~[waɾasi]) /warasi/ ‘ 子供 ’
c. [kaguɯ**dʒ**i] /kaguzi/ ‘ 家の裏 ’
d. [hi**ⁿdʒ**i] /hi˜zi/ ‘ 肘 ’

3.3 鼻音

鼻音 /m, n/ の例を（26）にあげる。

（26） /m/ vs. /n/
a. [**m**oraŋatta] /mora˜gatta/ ‘ 盛られすぎた ’
b. [ka**m**aⁿdo] /kama˜do/ ‘ 分家 ’
c. [**m**a**n**agɯ] /managu/ ‘ 目 ’
d. [**n**e**m**aɾɯ] /nemaru/ ‘ 座る ’
e. [**n**aziɡi] /nazugi/ ‘ 額 ’

鼻音がコーダ位置にある場合，/m, n/ の対立はなくなり，後続する子音と調音位置が同じになる。日本語と同様，コーダ位置の鼻音は /k, g/ の前では [ŋ]，語末では [ɴ] あるいは前の母音が鼻母音化して発音されることもある。例を（27）に示す。

（27） コーダ位置の鼻音
a. [ke**m**pi] /kenpi/ ‘ 首や足の筋 ’
b. [ɡa**m**be] /ganbe/ ‘ できもの ’
c. [u**n**tʃi] /unti/ ‘ うんち ’
d. [na**n**da] /nan-da/ ‘ 何 -COP’
e. [u**ŋ**ko] /unko/ ‘ うんこ ’
f. [dʒeŋko] /zjen-kko/ ‘ 銭 -DIM’
g. [taɴ ~ ta**ã**] /tan/ ‘ 痰 ’

/˜p/, /˜b/ という音素（（18），（19）参照）と，/mp/ や /mb/ の音素連続の違いに関しては 4.3 節で議論する。（27c, e, f）のように無声子音 /t, k/ の直前や，（27g）のように語末に鼻音が現れることもあるので，これらの鼻音は前鼻音化ではなく，直前の音節のコーダ位置にあると考える。（27d）[na**n**da] の /nan/ は *nani*，（27f）[dʒeŋko] の /zjen/ は *zeni* の *i* が落ちたものと考えられるので，前鼻音化していない /n/ が存在していると想定してもそれほど奇妙ではない。

コーダ位置の鼻音の音韻規則を（28）に示す。

（28） コーダ位置鼻音の調音変化

a. /n/ → [m] / ___ [+labial]

b. /n/ → [ŋ] / ___ [+velar]

c. /n/ → [ɴ] / ___ #

d. /n/ → $\tilde{\text{v}}_i$ / v_i ___ #

e. /n/ → [n] / elsewhere

3.4 弾き音，接近音

/r/ は，日本語共通語と同様，弾き音 [ɾ] である。例を（29）に示す。共通語と同じように，/r/ は語頭に出現しづらい。

（29） /r/

a. [oɾa] /ora/ ‘1 (私)’

b. [kaɾɯ] /karu/ ‘ 買う ’

c. [heɾɯ] /heru/ ‘ 言う ’

d. [meɾaʃi] /merasi/ ‘ 女の子 ’

e. [ko^{m}biɾi] /kombiri/ ‘ おやつ ’

両唇軟口蓋接近音 /w/ は，両唇，そして軟口蓋と舌を接近させて発音する。後続する母音は主に（30a, b）のように /a/ だが，/ɛ/ が後続する例（30c）も 1 例だけ見つかっている。

（30） /w/

a. [**w**a] /wa/ ‘1 (私)’

b. [he**w**aʃine] /hewasine/ ‘ せわしい ’

c. [ko**w**ɛ] /kowɛ/ ‘ 疲れた (adj)’

硬口蓋接近音 /j/ は硬口蓋と舌を接近させて発音する。（31）にあげた例のように，/j/ は /a, u, o/ には先行するが，/i, e/ に先行する例は見つかっていない。

（31） /j/

a. [**j**ameɾɯ] /jameru/ ‘ 痛い (v)’

b. [kara**j**aɡi] /karajaɡi/ ‘ さぼること ’

c. [**j**ɯɡi] /juɡi/ ‘ 雪 ’

d. [**j**ɯ^{m}pɯ̥te] /ju˜pute/ ‘ 煙たい ’

e. [**j**oɡɯtaŋaɾi] /joɡu-ta˜gari/ ‘ 欲張り者 ’

f. [hi**j**oɾi] /hijori/ ‘ (足駄より低い) 下駄 ’

4. 音節構造

この節では音節構造について議論する。4.1 節で長母音，4.2 節で長子音，4.3 節でコーダ位置の /n/ に関してそれぞれ述べる。

4.1 長母音

日本語諸語では長母音を持つ方言が数多く存在するが，この方言には長母音はないと考えられる。例えば /kendo/ ‘ 道 ’ は [kaido:]. ‘ 街道 ’ が語源なので，語末の [o] は長いことが期待されるが，図 4 からわかるとおり，[e] と比べて全く長くない。4.3 節で議論するとおり，語源的に長母音だったものは，前鼻音の [n] が長くなったものに置き換えられていることがある。

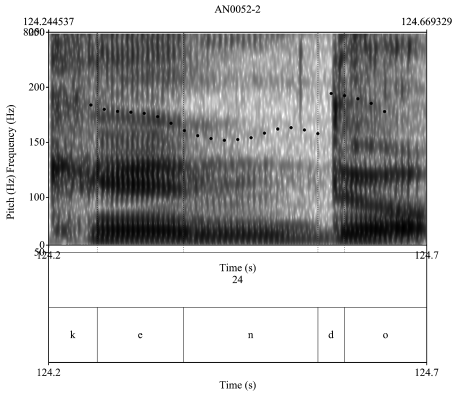


図 4　/kendo/ ‘ 街道，道 ’

4.2 長子音

有声母音に挟まれた閉鎖音はほぼ必ず有声なので，同じ環境に出現する無声閉鎖音を長子音として記述するのが良いと考えられる。長子音は普通の無声子音に聞こえることもあるが，すべて長子音として記述する。例を（32）にあげる。

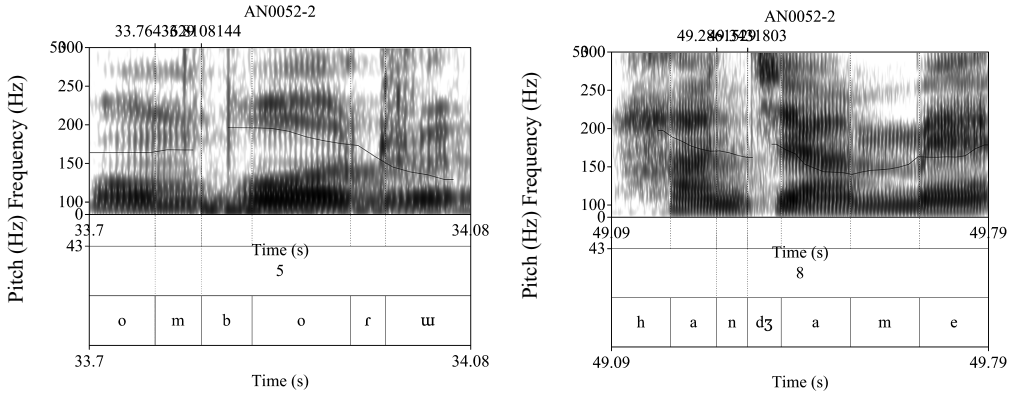
（32） a. [dʒeŋ**kk**o ~ dʒeŋ**k**o] /zjen-kko/ ‘ 銭 -DIM’
b. [otʃa**kk**o ~ otʃa**k**o] /otja-kko/ ‘ お茶 -DIM’
c. [mi**tt**agɯne ~ mi**t**agɯne] /mittagune/ ‘ 醜い ’
d. [o**kk**e**tt**a] /okketta/ ‘ 転んだ，こけた ’

4.3 コーダ位置の /n/

最後に，コーダ位置の /n/ の認定の問題について議論する。3 節で議論したとおり，野辺地方言は，有声閉鎖音が前鼻音化した /ᵐb, ⁿd, ᵑg, ⁿz/ などの音素を持つ。一方，3.3 節でも触れたように，コーダ位置の /n/ も想定する必要がある。（27g）[taɴ] /tan/ ‘ 痰 ’ のように /n/ で終わる語があるのに加えて，（27c）[u**n**tʃi] /unti/ ‘ うんち ’，（27e）[uŋko] /unko/ ‘ うんこ ’ のように，無声子

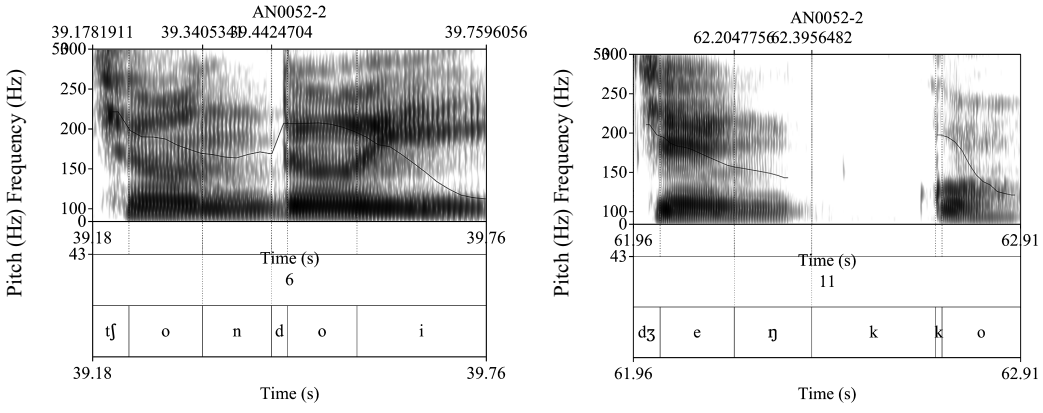
音に先行する /n/ が存在する。これらは新しい語の可能性があるが，（27d）[na**n**da] /nan-da/ ‘何 -COP’，（27f）[dʒeŋko] /zjen-kko/ ‘銭 -DIM’ のように，古い語で，*nani*, *zeni* の *i* が落ちたと思われる語も存在する。しかも /zjen-kko/ の /n/ は無声子音に先行しているので，やはりコーダ位置に /n/ を想定する必要がある。話者の直感でも，方言をひらがなで書いたときに，前鼻音は「ん」を書かないほうが普通だが，コーダ位置の /n/ は「ん」を書いたほうが良いと感じられるという[6]。

さらに，図 5，図 6 で比較されているとおり，前鼻音の [ᵐ]，[ⁿ]（図 5）のほうが，コーダ位置にあると想定される /n/ よりも短く発音されている。詳細な分析はまだ行えていないが，図 5 のような前鼻音はおおよそ 0.02 から 0.06 秒ほどであるのに対して，図 6 のような /n/ は 0.1 から 0.2



‘おぶる，背負う’　　‘だんどり’

図 5　前鼻音 [ᵐ(b)] と [ⁿ(dʒ)]



‘ちょうど良い’　　‘銭-DIM’

図 6　コーダ位置の /n/

[6] 話者の報告によれば，前鼻音化した音素 /ˇp, ˇb, ˇd, ˇg, ˇz/ には「ん」が入っている感じがしないという。

秒ほどの長さであり，倍あるいはそれ以上の差がある。図 5 の [oᵐboɾɯ] ‘おぶる，背負う’ の [ᵐ] の長さは 0.046 秒，[haⁿdʒame] ‘だんどり’ の [ⁿ] の長さは 0.057 秒である。一方，図 6 の [tʃondo] ‘ちょうど’ の [n] の長さは 0.102 秒，[dʒeŋko] ‘銭 -DIM’ の [ŋ] の長さは 0.191 秒である。図 4 の [kendo] ‘街道’ の [n] は 0.138 秒で，これも前鼻音化した /ˆd/ ではなく /n/ と /d/ の連続と考えたほうが良さそうである。ただし，この長さの違いが必ずしも話者の直感と一致するわけではなく，[kendo] の [n] は「ん」と書かないほうが良いという。

この鼻音の長さの違いは，*nani*, *zeni* の *i* が落ちたもののほか，語源のモーラ数を保持する役割を果たしていると考えられる。例えば，[tʃondo] はその語源と思われる /tjaudo/ のモーラ数を保持しようと [n] を長くしていると考えられる [7]。同様に，[kendo] も /kaidoo/ であったと考えられ，[ken] と /kai/ のモーラ数を同じにしようとする力が働いている [8]。

5. おわりに

本稿では，青森県上北郡野辺地町で話されている南部方言の一変種の音韻を概観した。共通語化の影響によってか，母音，子音ともに揺れが大きく，この「揺れ幅」でしか音素を同定できないと主張した。コーダ位置の /n/ の認定の問題など，まだ未解決の問題があるが，今後の課題とする。本稿では全く触れなかったアクセントの記述なども今後の研究課題としたい。

補遺 1：単語の読み上げリスト

me ‘目’，me ‘前’，ase ‘浅い’，ase ‘汗’，keru ‘帰る’，keru ‘消える’，niru ‘煮る’，neru ‘煮える’，neru ‘寝る’，omberu ‘覚える’，miru ‘見る’，meru ‘見える’，meheru ‘見せる’，mekkeru ‘見つける’，e，i ‘家’，izusi ‘飯鮨’，rogu-nin ‘6 人’，rogu-nen ‘6 年’，kena ‘腕’，henaga ‘背中’，bokkire，bokkiri ‘棒きれ’，hinaga, hinanga ‘膳の終わりに出る蕎麦’，igi ‘息’，egi ‘駅’，koi ‘鯉’，koe ‘声’，ke ‘毛’，beko ‘牛’，iga ‘イカ’，gani ‘カニ’，ue ‘上’，kene ‘食えない’，ne-kko ‘苗’，ne ‘根’，ome ‘お前’，de ‘誰’，k**e** seba i ‘こうすればいい’，s**e** seba i ‘そうすればいい’，**e** seba i ‘ああすればいい’，d**e** seba i ‘どうすればいい？’，ambe ‘あんばい’，tura ‘顔’，nazugi ‘額’，tume ‘爪’，asi ‘足’，kudi ‘口’，sita ‘舌’，titi ‘乳’，mutu-wan ‘むつ湾’，timbigi ‘千曳（地名）’，mimi ‘耳’，agita ‘あご’，jumbi ‘指’，hiˆzi ‘ひじ’，hiˆza ‘膝’，sune ‘すね’，kosi ‘腰’，kettu ‘尻’，motu ‘臓物’，tuba ‘唾’，suso ‘裾’，kutu ‘靴’，kiˆzu ‘傷’，kobura ‘ふくらはぎ’，kamari ‘におい’，kiku ‘菊’，kuki ‘茎’，karu ‘買う’，sarukozingi ‘遠慮する人’，hurudangeru ‘手を広げる’，baori ‘笠’，heru ‘言う’，soba bari ‘蕎麦ばかり’，nemaru ‘座る’，jo tadu ‘役に立つ’，hirimegu ‘ひりひりする’，jameru ‘痛い’

ただし，無声化した母音，太字の母音は分析対象外である。

[7] 実際に ‘ちょうど’ という語彙がいつ野辺地方言に取り入れられたのかは不明であるが，‘ちょうど’ が /tjaudo/ であっても /tjoodo/ であってもモーラ数は同じで議論は成立するため，ここでは仮に /tjaudo/ とした。
[8] /kaidoo/ の長母音 /oo/ は野辺地方言では無視されていると考える。中市（1936/1999）でも，多くの長母音で終わっていたはずの語が野辺地方言では短母音化している。

補遺 2：グロス一覧

1: 1 人称　　DIM: 指小辞
2: 2 人称　　PL: 複数接辞
COP: コピュラ　COM: 共格

参照文献

井上史雄（1968）「東北方言の子音体系」『言語研究』52: 80–98.
上野善道（1973）「岩手県雫石町方言の音韻体系」『日本方言研究会第 17 回研究発表会発表原稿集』23–34.
上野善道（2017）「青森県南部方言の名詞のアクセント資料」『国語研究』80: 1–22.
大橋純一（2002）『東北方言音声の研究』東京：おうふう.
此島正年（1982）「青森県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『北海道・東北地方の方言』213–236. 東京：国書刊行会.
齋藤孝滋（1992a）「岩手県一関市舞川方言の音韻」『日本文化研究所研究報告 別巻』29: 108–83.
齋藤孝滋（1992b）「岩手方言における語中子音有声化・鼻音化現象：言語内的・外的要因の観点から」『国語学』168: 124–111.
齋藤孝滋（1993）「岩手県三陸町綾里方言の音韻」『東北大学文学部日本語学科論集』3: 37–48.
高田三枝子（2006）「語頭有声破裂音における VOT の地域差と世代差 : 東北から関東の分析」『日本語の研究』2(2): 34–45.
中市謙三（1936/1999）『野辺地方言集』青森：野辺地町.

Phonology of the Noheji Dialect in Nambu, Aomori

NAKAGAWA Natsuko

Language Variation Division, Research Department, NINJAL

Abstract
This paper describes the phonology of the Noheji Dialect, a variation of the Nambu Dialect, spoken in Noheji-machi, Kamikita, of the Aomori Prefecture. After an overview of Noheji-machi, the study discusses vowel and consonant inventories and phonotactics. It is argued that a phoneme can be identified only by counting variations because there are wide variations of a phoneme, which are influenced by Standard Japanese. Specifically, phonemes /i, u/ are difficult to define. The phone [i̞] can be either /i/ or /u/. However, [i̞] is sometimes pronounced only as [i] without any variations, in which case it is difficult to decipher whether it is /i/ or /u/. In phonotactics, long vowels are not part of the phonology of the Noheji Dialect, and geminates and coda /n/ are considered distinct. Finally, certain ancillary issues are pointed out.

Keywords: Tohoku Dialect, Nambu Dialect, Phonology